

◆ 川野里子選

盲目の君は腕時計のふたを開け知らせてくれた時刻に触れて  
(神戸市) 澤田 効  
発馬機に教室が見ゆ闊志まで衝立ごに分断されて  
(小平市) 真鍋 真悟  
ありがとうも(めんも言わず逝った父 母の袖から覗くヒートテック(青屋市) 福本 路子  
ユトリロ展絵にある道の消失点見えなくなるまで生きてゆくこと  
(京都府) 森谷 弘志  
植物園をふたりでゆけばにんげんの特技は歩くことだとおもう  
(京都市) 袴田 朱夏  
祖父ちゃんはいくすりをいつも転がしてほりをつけてから飲んでます(小諸市) 星野 直人  
車を押しつつ思ふ母は母の目の高さにて世界と出会う  
(仙台市) 小室 寿子  
登り棒力いっぱいいたぐり寄せきみは冬の在り処へ近づく  
(富谷市) 川村 空也  
わたしいま聖徳太子モズ、メジロ、ヤマガラ、コゲラ、ヒヨ、ジョウビタキ……  
(松阪市) こやまはつみ  
抜き去ってゆくランナーのふくら腰カスターネットを鳴らす(川崎市) しんどう藍

【評】一首目、触れて知る時刻が未知の新鮮さだ。二首目、競馬のようにクラス分けされて競う受験生たちがいる。三首目、心が通じぬままの別れ。生き残る母のヒートテックが切ない。六首目、祖父がとり落とす錠剤を見る孫の目が面白い。

◆ 佐佐木幸綱選

人生初女子に「お義父さんお義母さんと呼ばれて我ら一升空くる(さいたま市) 齋藤 紀子  
☆マスクから覗く目やさし片言の日本語しゃべる君は介護士  
(横浜市) 関水紀美子  
待受に咲き乱れたる百日紅 母のスマホを解約にゆく  
(さいたま市) 山口 晋裕  
バイオリン奏者の孫は病室で危篤の祖父に二曲弾きけり  
(敦賀市) 田中 典子  
遠方で悲鳴聞こえて振り向けば降下していくバンジージャンプ  
(茨木市) 瀬川 幸子  
ぐるぐるにテープ巻かれし滑り台散々工事の日を待つてをり  
(つくば市) 山瀬佳代子  
目を合わせ手も指も顔も全身で手話伝えたいが伝わって  
(新潟市) 鎌倉 洋子  
バタバタとドアミラーに百舌鳥が来て突いて蹴つていつまでも帰らず(福島県) 添田 敏夫  
ふるさとの訛りで語る友集ひまづは名札と顔を確かめ  
(横浜市) 白川 修  
故郷の小さな町の駅ピアノ「トルコマーチ」を弾きて別れぬ  
(松戸市) 橋 玲子

【評】第一首、息子ばかりを育ててきた夫婦に、はじめて義理の娘ができたのだ。下句、なんとも楽しそう。第二首、外国人介護士である。上二句、うまい。第三首、母上のスマホをはじめて手にしたのだろう。下句、簡潔かつ的確。

◆ 高野公彦選

友好を願うおもしし温和なり東北大にたつ魯迅像  
(仙台市) 沼沢 修  
優勝のダニール・ヤブグシンの名を地球儀を回し子と繰り返す  
(町田市) 山田 道子  
「世界中が平和になれば」と安青錦語る長崎平和の像前  
(香取市) 篠崎美代子  
軍事費を増やし生活保護減らす美しき国に我は住みおり  
(朝霞市) 岩部 博道  
華やかな都会の冬のライトアップ電気は本当は足りているのだ  
(新潟市) 鈴木 秀子  
☆疲れたら休めと妻は言うけれど会社に行けば疲れは取れる  
(横浜市) 高野 茂  
平和とは「自分のベッドで寝ること」とキーウの少女に安眠はまだ  
(中野市) 黒岩美智子  
雨の日も降りそうなの日もありがとう新聞包むビニール袋  
(札幌市) 山田 広一  
☆マスクから覗く目やさし片言の日本語しゃべる君は介護士  
(横浜市) 関水紀美子  
トンネルと防音壁に囲まれて新幹線と壁を見る旅  
(江別市) 長橋 敦

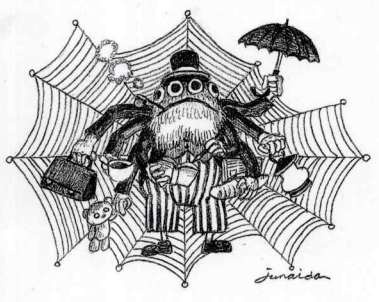
【評】1首目、魯迅は浙江省の人で、東北大の前身に留学した。その面差しは日中友好を願うかのように温和。2首目と3首目は、安青錦に対する深い関心を詠む。4首目、日本を美しい国と言う人はいるが、しかしその実態は、という歌。

◆ 永田和宏選

食卓のあなたの席はななめ前この距離感ふたり居てこそ  
(寒河江市) 松浦 明子  
誰のために泣いているのか分かれぬが父に手を振るバスに乗る時  
(佐世保市) 近藤 福代  
熊を恐れ熊を哀れみ銃を持つにんげんの手に雪降りしきる  
(福島市) 美原 凍子  
親方と友人の名と国旗の色をわが身に纏う安青錦新大  
(川崎市) 寺尾和比斗  
ロソクの炎が揺れる誰だろ朝の祈りに頷いたのは  
(盛岡市) 榎本 拓  
給食のアルミの器具いミルクLARAのお陰で我らは育った  
(豊田市) 近藤 敬二  
鯛焼き屋一つだけ買う勇気無く素通りしていた寡婦一年目  
(東京都) 小林 容子  
「年齢のわりには元気な爺です」看護師さんに少し傷つく  
(観音寺市) 篠原 俊則  
新聞に掲載される快感をたぶんAI知らないだらう  
(対馬市) 神宮 斉之  
☆疲れたら休めと妻は言うけれど会社に行けば疲れは取れる  
(横浜市) 高野 茂

【評】松浦さん亡くなった人の不在を、椅子ほど感じさせるものはないだろう。斜め前に居る爺のあなた。近藤さん、介護施設に父を置いて帰らなければならぬ作者に、意味もなく流れる涙。十首目、これを探っているのだからかと迷いつつ。

朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 36〉 junaida

短歌時評 子規の魂を引き写す

山崎 聡子

紀貫之は下手な歌人であって、『古今和歌集』はくだらないアンソロジーである。明治31年に発表され、近代短歌の礎となった正岡子規の伝説的論議「歌よみに与ふる書」の現代語訳が発売された。手がけたのは口語短歌の旗手・永井祐。「現代語訳」と言うが、原文はいわゆる「候文」で書かれており、永井訳は意訳に近い。しかし、ときにうづて口語的な永井訳は、死のたつた四年前、すでに病床にあった三千歳の子規の滾る魂をそのまま引き写すことに成功している。そのままと歌集を批判し、有名歌人の歌をこき下ろすなど、ほとんどが伝統的短歌の否定から成る本論だが、子規の主張は終始クリアで一貫している。形骸化した言葉で歌を詠まないこと。理屈に落ちないこと。陳腐な嘘を吐かないこと。短歌の調を唯一視せず、多様な調を用いること。永井による解説に子規の論の一種異様な熱量をネット上の怪文書に喩えるくだりがあるが、子規の主張は現代も形を変えて短歌の批評空間に存在する言説と通じる。

現代語訳によって鮮明になったのは、時代を超えて人を揺き立てる子規の言葉の魅力であり、賛否にかかわらず、これに揺き立てられた人々の連なりによって短歌や俳句が生きてきたという事実だろう。

今年には高良真美による近代歌人のアンソロジー『みんなの近代短歌』も出版された。明治後期以降の十五歌人の歌が収録されており、手厚い解説やブックガイドも親切だ。どちらも、近代歌人の思っかいが感じられる良書といえる。(歌人

角谷昌子著「俳句の水脈を探る 平成・令和に逝った俳人たち」 俳人による評論集。阿波野青畝、加藤秋邨、深見けん二、有馬朗人、稲畑汀子、黒田杏子、鷹羽狩行ら37人の俳人の生涯を紹介するとともに、作品の数々を鑑賞し、論考を加えた。故人に師事した俳人や関係者にもインタビュー取材して、多面的な構成にした。(ふらんす堂・3080円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。

風信